

淨土

1992-5

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（運輸省 特別致意承認雑誌） 第三五号
平成四年四月二十五日印刷 平成四年五月一日発行
第五十八卷 五月号





五月の秀句

草も樹も水明りして夏来る日

中村 燦

夏めくや椎のかづきし雲のいろ

高橋 潤

青空の中に風ふく薄暑かな

松瀬 青々



弥陀は不取正覚の願を発こして、
しかも正覚なりて、既に十劫を経
給えり。

——『念仏大意』

目 次

＝連 載＝

生も死も悦べる世界(六)……………須 藤 隆 仙……(2)

にここ法話

ミーちゃん結婚式に出る……………長谷川 岱 潤……(9)

〈読者のページ〉

法然領解文集……………大 橋 賢 ……(16)
——選択集を中心に——

季語やぶにらみ (23)

……………木 下 隆 一 ……(26)

壬申の年(3)

◇◇心のしらべ・生活のうた⑤◇◇

万葉歌人輩出す・壬申の乱……………細 田 隆 善……(22)

表紙絵 小林治郎画

連
載

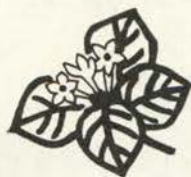
生も死も悦べる世界(六)

生まれ難き浄土

折角この世に生まれ出た上は、出来損いで終わったのでは勿体ない、自分が他から生かされているように、自分もまた他を生かす力にならなければならない、それが自然の大法の真のすがたであって、真人生とはそこにこそあります。その真人生に到達することが輪廻を離れるということであります。しかも浄土宗では、自力で簡単に真人生へ到達することとは至難であるから、仏様を信じて、仏様の名を称えて、救済の理にのっとって、その

須^す
藤^{どう}
隆^{りゆう}
仙^{せん}

(函館市称名寺住職)



仏力によって到達させて頂くということを教えているわけであります。そういうことを前回述べたのであります。

さて、このようにして離れ難き輪廻の里を離れさせて頂いた（真人生、その具体的なすがたを、浄土宗では、往生浄土というわけであります。

ですから浄土に往生するというのは、ただ遊びに行くのではない、楽をしに行くのではないのです。善導大師の『発願文』^{はつがんもん}にありますように、「彼の国^かに至りおわって、六神通を得て十方界^{かふ}に入^かって苦の衆生を救^く摂^{しやう}せん」ということなのであります（救摂は救いとするの意）。

そこで今度は、「浄土」ということについて申し上げてみたいと思います。

「人生の帰結^{ききつ}」とか「人生の帰趨^{きすう}」とかいうことがいわれますが、浄土に往生するということこそ、正にそれであると私は愚考しているのであります。

浄土に往生して、善導大師の発願文にありますように、人々を救う力となる、それが即ち人間として生まれてきた真実の姿でありまして、植物でいえば、芽が出て、成長し、花が咲き、実を結んだということでもあります。人々を救う力となつてこそ、初めて実を結んだといえるのでありまして、人生最後の目的というのは正にそれにあるわけです。植物の発芽の最後の目的が結実であると同じように、人間も最後に利他救済の力となつてこそ、

世に生まれ出た意義を全うしたことになるわけであります。

そのためにこそ、本願にも逢わしてもらわねばならないし、道心も起さねばならないし、輪廻から離れることもしなければならぬのであります。

ここのところが解かってきますと、お浄土、極楽浄土というところは、私たちが最後に当然そこへ帰らなければならぬ世界である、即ち帰結すべき世界、帰趨の世界である、ということが解かってくるのであります。

私は今から二十数年前に、札幌市に本社のある『北海タイムス』紙から依頼されて、その「宗教欄」に、「經典百話」というものを連載いたしました。愚凡の私ですが、そのために一切経を通読する機会に恵まれたのは幸せなことでありました。この百回の連載ものは、のちに東京の新人物往来社から『經典の知識一〇〇』という題で出版されました。自分からいうのも何ですが、有難いことに大変好評で、静岡県伊東市に住むあるお方からなどは、「死ぬ時まで何回でも読ませて頂きます……読めば読むほど有難く感じます」というお葉書を頂き、ミカンを送って頂いたりしたものでした。

その中では私は、極楽浄土を「私たちの帰るべきふるさと」と説明しておいたのです。最近、ある仏教評論のお方が、同じようなことを書いておられるのを拝見いたしました。二十数年前の若かった頃の私の信解が、間違いでなかったことを知って嬉しい思いがいた

しました。

そこでその一文を左に転記してみたいと思います。

「極楽浄土」

—— 私たちの帰るべきふるさと ——

阿弥陀経の前半には、阿弥陀仏や、その浄土（極楽）の様子が説かれているわけですが、それらを説かれたあとで釈尊は、「南無阿弥陀仏」の念仏をとなえることによって、その浄土に生まれゆくことができるのだ、と教え、「われこの利を見るがゆえに、このことばを説く」といつておられます。

つまり、実際に自分は、そのような利益を実見しているので、それでこのことを説いているのである。というのでありまして、釈尊自らが、自分の言説を証明して衆生の疑心を除こうとされたものであります。

ここで考えられるのは、極楽浄土に生まれる、などといつても、現代の人たちには、ちよつと受けいれがたいであろう、ということであります。

そこで、この極楽浄土ということを、現代ふうに表示してみる必要があるのですが、

中国で唐代に浄土教を広めた有名な人に、善導大師ぜんどうという高僧がおりますが、この善導大師が、極楽について「帰りなんいざ、魔郷にはとどまるべからず」といつているのであります。これは観無量寿經の註釈書の中でそういつているのですが、「帰りなんいざ」というのは、有名な陶淵明の言葉であります。

陶淵明は彭沢けんだいの県令となったとき、郡の長官が正服を着て面謁せよといいました。彼は憤慨して、即日辞職して帰郷したわけですが、そのときに記した一文の冒頭が、この「帰りなんいざ」でありまして、六朝一の名文とうたわれているのであります。善導大師はこの名文をもつてきて、ま「帰りなんいざ、魔郷にはとどまるべからず」といつているのであります。魔郷というのは、この娑婆世界のことであります。この娑婆世界は魔のすみ里である。そんなところにいつまでもとどまることなく、故郷へ帰りましょう、とこういふのであります。

さてここできわめて注目しなければならぬのは、極楽を「ふるさと」にたとえていることであります。陶淵明が封建的な官吏の生活から逃れて、心のあたたまる「ふるさと」へ帰っていったごとく、ほのぼのとした「ふるさと」を極楽といっているのであります。

つまり極楽とは、私の「ふるさと」のことであります。「ふるさと」であるからこ

そ「帰りなんいざ」ということで、帰るべき世界なのであります。

これについて思い出されるのは、先年、癌で亡くなられた、作家の高見順氏のことです。

高見さんは、日々に迫りくる自分の死期に、たいへんな苦悩をあげまいとた。苦しんで苦しんで、苦しみつくしたとき、高見さんは、高見さんなりに、「死」ということを解決したのでした。

それは死ぬということとは、「ふるさとへ帰ることである」という悟りでありました。その生死を解決した心境を、高見さんは一つの美しい詩によんだのであります。それが詩集『死の淵より』の中に収められている『帰る旅』の一編であります。

高見さんは、その中で「帰れるから、旅は楽しいのであり、旅の寂しさを楽しめるのも、わが家にいつかは戻れるからである」といい、「この旅は、自然へ帰る旅である、帰るところのある旅だから、楽しくなくてはならないのだ、もうじき土に戻るのだ……大地へ帰る死を悲しんではいけない、肉体とともに精神も、わが家へ帰るのである」とうたっているのであります。

遠くは善導大師の「帰りなんいざ」といい、近くは高見順氏の「帰る旅」といい、みな極楽浄土を、そのように信解したものでありまして、極楽こそまさに「私の帰る

べきふるさと” なのであります。

釈尊は阿弥陀経のなかで、じゅんじゅんと、この “ふるさと” のことを説かれたのでした」

以上のように、お浄土は私たちの故郷なのであります。帰るべきふるさとなのであります。

帰るといふことは、そこから生まれて来たということでもあります。私たちは、実は極楽浄土から生まれて来たのであります。そして、またその極楽浄土へ帰って行くのであります。極楽浄土からこの娑婆世界へ出稼ぎに派遣されて来たのであります。この娑婆で与えられた仕事を仕終えれば、今度はもとのふるさとの極楽へ帰って行くのであります。

故郷へ帰ることを知ったとき、人間は本当の真人間になれたのであります。故郷がありながら、それを知らずにいるのではルンペン（浮浪者）であります。心のルンペン、人生のルンペンになつてはいけません。故郷へ錦を着て帰る身にならなければなりません。それがお念仏です。お念仏という錦を着て、私たちは極楽へ帰るのです。いや、帰らして頂くのです。

（つづく）

ミーちゃん結婚式に出る

長谷川 岱潤
（東京・品川区戒法寺住職）

金曜日、学校の授業が終わるとすぐに

ミーちゃんは家に走って帰りました。今朝、お母さんから言われたことに胸がわくわくしていたからです。

「ミーちゃん、夕方、明日のひろこちゃんの結婚式のリハーサルしますから、今

日は早く帰ってきてね」

明日午後からいこのひろこお姉さんの結婚式が、ミーちゃんの家のお寺で行われるのです。そしてその結婚式で、ミーちゃんは三三九度の杯の雌蝶をやるように言われたのです。ミーちゃんはもう浮

き浮きしていました。

「お母さん、ただいま」

「あら、早かったわね。こんなに早く帰れるの」

「今日は、特別よ。すごいお花の量ね」

「そうよ、家中のお花取り替えるのですもの」

「結婚式だと、お花、華やかでいいね」

「お母さんは、このお花生けてしまうし、お父さんもまだ、お飾りの用意しているようだから、ミーちゃんは今のうちに宿題があつたら、しちやつときなさい」

「はい、つまんないの」

ミーちゃんは早々に宿題を済ませると、そつと本堂に行つてみました。お父さんはまだお飾りを近所のお寺さんと一

緒にこしらえているようでしたので、声をかけずミーちゃん一人で行きました。

「あれ、いつもと全然違う」

ミーちゃんは思わず声が出そうになりました。いつも正面の阿弥陀様のほうを向いている、お父さんの席が、阿弥陀様に背を向けてお外を向いています。そして、その前にイスが二つ置いてあり、その外側にもう二つ置いてありました。そして本堂の両わきに、イスが本堂のほうにむけて並べてありました。正面を見ますと、阿弥陀様の前には紅白の大きなお餅が飾られてあり、驚いたことにその前に紅白の紙で縁どられたお位牌がそのまま置かれていました。そしてお母さんがさつき生けていたきれいなお花が飾られ

ていましたし、お父さんの席には松が入っていました。

「へえ、結婚式っていつもと全然違うんだなあ」

ミーちゃんは一人で本堂の中を歩き回っていました。そしてお父さんの机の前のイスにすうっと座りました。そのときです。

「ミーちゃん、花嫁さんは左のイスだよ」
お父さんが笑いながら本堂に入ってきました。

「やだ、お父さん驚かさないでよ」

「ミーちゃんはそのイスに座るのは、まだ早すぎるよ」

「あたりまえです。それより早くリハールしましょうよ」

「そうだね、それじゃお母さんにも来てもらって、一回やってみるか」

「わたしはどこにいたらいいの」

「そうだなあ、出番はずっと後の方だから、しばらくは隅のイスに座っていておくれ」

それからリハールが始まりました。

近所のお寺さんが最初に登場し、本堂の四隅を清める道場酒水という儀式が行われ、それからCDで越天楽を流し、新郎新婦が入場したことにして、そしてお父さんが登場。阿弥陀様に向かってお経をあげた後、振り向いて席につき、永々といろいろなことを読んでいました。しばらくして、お父さんが、

「これにて仏式に則った式を終了し、世

俗の方に従って式を進めます」

と、言ったところでミーちゃんが呼ばれました。

「ここで三三九度だよ、静かに真ん中にきてちょうだい」

ミーちゃんはお正月のお屠蘇の時使った容器をとり、後からお母さんに言われるとおり、新郎新婦の席の人に何度も何度もつぎました。息が詰まる思いで、とても緊張しました。

「ミーちゃん、本番の時、大丈夫？」

「お母さん、大丈夫よ、心配しないで」

「ミーちゃんは本番に強いからなあ」

「お父さんは、すぐそういうことを言う」

三人は笑いながらリハーサルを終わりました。

夕食も終わり、ミーちゃんは何となく落ち着かずお父さんの部屋をのぞきました。

お父さんは明日の読みものの原稿を手直ししていました。

「お父さん、ちよつといい？」

「いいよ、どうした、落ち着かないのか」
「ううん、あのさ、キリスト教の結婚式だと、新郎新婦の誓いつてあるじゃない。仏式だどうなの？」

「一番最後に、『誓いの言葉』というのを、新郎新婦が読むんだよ」

「そうじゃなくってさ、ほら、神父さんが誓いますかって、聞いたりするじゃない。ああいうことお父さんはしないの？」
「それはないね。結婚式の意味が、キリ

スト教と仏教では違うんだよ」

「え、意味が違うの？」

「そう。キリスト教では、結婚式はこれからの生活を誓うことが式を中心なんだけど、仏教では、二人の出会いを感謝することが中心なんだよ」

「へえ、感謝するの」

「そうだよ、お父さんが物語のような話をしたでしょう」

「ええ、どんなだった？ もう一度聞かせて」

「お釈迦さまの前世の物語でね、昔々に燃燈仏という仏様がこの世においでになつてゐる時に、国王がお花を仏様に供養することが、功德がとても高いということで、国中のお花を集めてしまふんだ。

その時雲童子という青年がお花を供養しなくて探していると、賢者という少女が七本の花を持って通りかかるんだね。雲童子は何とかその花を売ってくれるように頼むのだが、少女はこの花も国王に届ける花だからだめだと言う。そこで青年は全財産を差し出して頼むので、少女はその理由を聞き、仏様に花を供養することの功德の大きさがわかると、少女は五本を青年に、二本を自分で持って仏様に供養し、夫婦となったそうだ。そして後に青年はマガダ国のシッダルタ太子に、少女は隣の国のヤショダラ姫として生まれ、またまた夫婦となったんだね。シッダルタ太子とはもちろんお釈迦さまの若い時の名前だよ。こういうお話にちな

んで、ほら、式の途中で新郎新婦が五本と二本のお花を持って、仏様のところに行き、お焼香していただくでしょう。これが行華（あんげ）焼香という、仏式結婚式のクライマックスなんだよ」

「つまり、お釈迦さまのまねをするってこと？」

「お釈迦さまの前世のね。つまりね。結婚するということ、二人が愛しあつて一緒になるってことは、偶然二人が出会い、たまたま愛しあつたということではないということなんだよ。偶然や、たまたまだったら、二人の感情が変わったら、ハイそれまでということでしょう。そうじゃないんだ。二人の出会い、そして結ばれるということは、二人の前世から、

遙か昔から決まっていたことだと仏式では説くんだね。赤い糸が結ばれているって言うこと聞いたことないかなあ」

「ああ、あるある」

「でしよう。だから仏式では、決まっていた相手に、そのとおりめぐり合うことができたことを仏様に感謝する、そこに大きな意味があるのさ」

「ミーのお相手ももう決まってるのかなあ」

「そうだろうね、もうどこかで生きてるんだらうね」

「わたしの結婚式も仏式でやろう」

「まだ当分先にしてくれよな」

◎ “維持会員”へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十八巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金三万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

法然領解文集

——選択集を中心に——

おお はし けん いち
大 橋 賢 一

《選択集について》

「選択集」安樂房執筆説は、「選択集」そのものを過激な書であるとのみ見る見方である点、私にはとうてい肯んじ得ないのであるが、心低の微妙なところにおいて頷けるのは、やはりその聖道批判の鋭さゆえであろう。

しかし、「集」各所において、例えば四弘誓願を総願として認容し、六度中の精進を長時修に通わせたり、その極証としての「傍正」義等、常に通低の柔軟さを秘めている点、相依・縁起の体解^げ無比とする所似である。

○ 今日、勤めの合間にライフワークということばに目をひかれて、しばし自分のことに思いを至した。——もう決まっている。私のラ

イフワークは、法然上人顕彰なのだ。法然上人に値遇したことは、無上のよろこびである。これあるゆえに、私の人生の甲斐はある。

関連して、山崎弁栄上人の光明主義、何も十二光に付合せずとも、既に「選択集」に、五常・十地を出だして体系づけられてある。

金子大栄師は学問のあり方・原則として、「対象（何を）」「方法（いかに）」「理由（なぜ）」という三つの範疇に分析された。この夕べ、私はふと気づいたのである。「選択集」の第一章から第三章までは、まさにその学問の三原理に相当するのではないかと。即ち、二門章は「浄土宗」を挙げて方法を示し、二行章では「称名念仏」を挙げて方法を示し、本願章ではその根拠・理由を示す。いよいよもって、上人の択法眼の確かさを思う。

法然上人は、その釈尊以来の縁起・相依性の体得によって、無比の柔軟性を得たものであった。かつ、それは「集」中にも散実見することく、「意周ね」き総体的目配りによって、称名往生の自宗と余他の諸教との通低をも考慮に入れた上での、しかし厳しい諸教批判を展開したのである。通低ゆえに一切諸教の要旨を浄土に含み入れつつ、しかも諸宗諸教の、仏教無我の現実否定を忘れた現実解消性を衝いたのであった。聖道の此土性言及がそれだ。

○
私は今、空海の文章に親しんでいる。その高度な漢文体、わからぬ点多いながらも快いのである。そして同時に、空海の全仏教史上における法身説法の完成態は、「心・仏及び衆生」無差別の「仏」の面を代表していると

見える。その点で、禪の「是心是仏」、ことに親鸞の「衆生の信心即仏」説と並ぶことになる。又それは、印度仏教の精華たる唯識の三性説とも重なるものだろう。しかし、いずれも現実肯定に傾る点、釈尊無我の教に抵解する。

また、隆寛論のあらましを読み終える。しかし、彼がかなり一念義に傾いた人であることは確かかなようで、彼が晩年まで天台から離れなかったことよりしても頷けるだろう。

ただ、それでありつつ、多念義を主唱したとすれば、上人の信一念・行一形の中道に沿うものと思われるが、「滅罪劫数義」や「散善義問答」などの着眼や問答体に、上人の「認・否」二様の相依性に基づく単単性に比して、なお「冗調」を感じてならぬのである。

《現実否定》

現実の否定の否定は、現実肯定と連なつてこよう。又、「自分のほうで計らつたらいけない」というのはむずかしい、と言っているが、当然である。自力・他力相対・感應しかなからう。「意志して出来ることは半分、あとの半分は向こうから」と吉本隆明氏が言っている。それしかないのだ。親鸞、「さまざま急進派」というのは私も同感で、仏教の相依・縁起性の理からはずれなかった、大変危険な仏教家だと私は思う。

現実否定の視点を堅持しなければ、現実は向上していかない。なぜなら、より善い現実を目指そうとするなら、その時の現状は、理想とする「より善い」状態より悪いはずだか

らである。即ち、理想を目指すには、現実否定の視点が不可欠なのであった。

これは、無理に現実を否定し、無にするところではない。常により善い理想を認めてのことなのだ。その現実否定を教えるのが仏教無我の教え。勿論、現実はそのとして認容する。

〈歌詠むは罪にて候ふか〉

坂本冬美に芸術選奨が与えられたのは、まことに快心事であったと、今さら改めて思う。彼女の暢やかな歌唱の実力は、今ごろの歌謡界にあつて、抽んでた風姿を示す。しかも、いわばかなり泥くさい演歌の歌い手でありつつ、「ヒズ」とかいふニューズ・ロックバンドと組んでこれも軽妙な味を発散するなど、まさに快い活躍というべきではないか。

ただ、彼女のビブラートに少しの不自然さ、又、低音の長音に少しの不快感あり。

○

○

仏教文学、というよりも、文学に表われた仏教性を摘出していきたいと思う。そういう意味の仏教文学であると、まず定義しておかねばならぬ。そしてそれには、仏教の真髓たる「相依・縁起、無我」の姿勢が納得されている必要がある。即ち、現実相と、現実否定相と、その浄化の過程と、その三つが生かされている文学。今のところ私には、その意味では、武田泰淳の文学しか浮かんでこない。

〈仏教と生命と自然〉

袴谷憲昭氏『批判仏教』中の「批判としての学問」を読む。かねて氏の本覚思想批判に

同感の点多いと感じていたが、今回、氏の文章を読んで、私との相違点が判ってきた。即ち、氏の現状批判は、ことに差別の現実への批判として、言葉で批判するためのものであるのに対して、私の現実批判は観念化として、いわば「語るに落ちる」のではなく、「行」をもつて無我を体得するための、現実肯定的傾向への全批判である点の違いだ。

袴谷氏の本覚思想批判は、その意、安易な現実肯定に陥って、差別等への視点をなくしてしまうことに対する批判にあると思われるが、私は少し違う。その現実肯定性を批判する点は同じだが、そして、現実にあつての、差別的現実を批判することも勿論含むが、現実肯定への批判ゆえに、あくまで総体的な現実否定を旨とすべきだと思う。なぜなら、仏

教の真意は、「無我」「寂滅」の現実否定にこそあると思うからだ。

○ ○ ○
「いのち」の思想は、厳密に言うなら、仏教無我の考えと撞着すると思う。確かに釈尊の教の中に、「衆生」として、いのちを持っている点で共通もするし、又、大経の中には「無量寿」を標榜する。しかし、それは相対的現実相から見た一面にすぎないのであつて、「生命」観に絶対性を与えるべきでなからう。「いのち」という、少し感傷的で絶対的（と見える）ものに寄りかかるのは、絶対性を排する仏教として慎むべきことだろう。

○ ○ ○
日本は自然の美しさが、宗教的超越をなす上で一つの陥穽になっていると思う。そんな

ことが思われる夕べであつた。しかし、ことに沙漠などと違い、あまりにも美しい自然に恵まれているから、その自然にもたれかかりやがて自然に解消してしまふ。かくして、現実への反省に伴う現実批判性が稀薄になっていく。欲界、色界、無色界を勝過しているといわれる所似であらうし、その点で、川端康成の「美しい日本」観も再考されるべきだ。

〈宗歌と一枚起請文〉

月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人のころにぞすむ

この法然上人の歌の意、今にしてようよう把え得るようになった。上の句の「普遍」性は、まさしく諸宗共「通」性を表わし、下の句は、その普遍共通の眞実の理を、個々「別」々に

体得する外ないことを示している。

それでこそ、主著「選択集」縁起・相依の理とびつたり重なるのであつて。「通・別」相依性は「選択集」の一つの奥義でもあると思う。

○

○

『一枚起請文』、「唐土・我朝に、もろもろの智者たちの沙汰し申さるる念仏にもうあらず。」ことに「唐土・我朝」の智者達を否定するところ、印度を含まぬ所に意味もあるとして、これは、尋常でない批判性だ。さらに、「三心・四修」なども「南無阿弥陀仏と申す中に「こもり候也」とされること、浄土門に一切を含み、「浄土に漏れたる法門なき」統摂性にも言及して、まさに上人最期にあつても、批判と統摂の相依・総体性は聊かも減じていない。

心のしらべ・生活のうた(五)

万葉歌人輩出す・壬申の乱

細田隆善(俳号豊明)

平成四年は干支との上から壬申じんしん(みずのえさるの)年である。本年から千三百二十年前の天武元年てんむ(六七二)も壬申の年である。天武元年は弘文元年こうぶんともいう。

明治三年になって大友皇子おほとものみこにおくられた弘文天皇の称号である。この年に壬申の乱が起きてわが国発展史上大きな影響を与えたのである。

しかもこのころから天皇をはじめ万葉の歌人がつぎつぎ活躍し、万葉集に秀れた歌が登載されたのである。天智（てんち）天皇は壬申の乱の前年になくなられたことが壬申の乱の導火線となったのである。

天智天皇もまた歌人である。つぎの歌は、「百人一首」のトップを飾って知られている歌である。

秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ 天智天皇

天智天皇は中大兄皇子であつたときに大化の改新を断行、都を大和の飛鳥から近江の大津宮に移し、近江令を制定、このときから年号を使用し大化元年（六四五）と称し、中央集権体制が確立され

るようになった。ところが天皇がなくなると皇子の大友皇子（弘文天皇）と皇弟の大海人皇子（天武天皇）との間に皇位継承の争いが発生したのである。

天智天皇に召された額田の王は代表的な女性万葉歌人であるが、大海人皇子と相愛となり十市皇女を産むほどであつた。天皇のともをして出かけたとき、大海人皇子を思つて、つぎの歌が万葉集に載っている。

あかねさす紫野行き野守はみずや君が袖振る 額田王

この歌に答えた大海人皇子の歌が万葉集にある。

紫のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも 大海人皇子

天智天皇がなくなつた半年後、吉野に入つていた大海人皇子は兵をあげ、各地の軍を結集し大友皇子の軍を一か月に破つて大勝をしたのである。大津の都は落ちて大友皇子は自決した。大海人皇子は大和に帰り、飛鳥の宮をたて、翌天武二年（六七三）即位して天武天皇と称された。

壬申の乱によつて前代以来の貴豪族の勢力を抑圧し、律令制度を確立して天皇中心の中央集権の政治が推進されたのである。また大陸との交流を高め、文化の興隆に役立つたのである。

天武天皇は朱鳥元年（六八六）なくなつてその皇后が即位し持統天皇と称した。天皇も歌人にして、つぎの歌が百

人一首の天智天皇のつぎに掲げられている。

春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほ
すてふ天の香具山 持統天皇

この歌は万葉集につぎのように掲げられているが、百人一首の若干変形されている。

春過ぎて夏来るらし白たへの衣干
したり天の香具山 持統天皇

百人一首の冒頭に掲げられた数首の万葉歌人の歌を観賞することとする。

あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む

田子の浦にうちいでてみれば白砂の
富士の高嶺に雪は降りつつ 山部赤人

『江戸物語』

細田隆善(豊明)著

——本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本に——

●四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録 ●定価一八〇〇円

《発行・発売》 ノンブル社

東京都新宿区新小川町六―三九―七〇一
電話(〇三三)三二六九―一二九三 三二六七―六六三七
振替(東京)七―一〇九三／千一六二

奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声きく
時ぞ秋はかなしき 猿丸大夫

かささぎの渡せる橋に置く霜の白き
を見れば夜ぞふけにける 大伴家持
あま 天の原ふりさけ見れば春日なる三笠
の山にいでし月かも 安倍仲磨

壬申の乱後は著名な万葉歌人がつぎつ

ぎと輩出し、万葉黄金時代を謳歌したのである。

◎ 訂正とおわび

『浄土』二月号20～22頁。「採茶庵」は「採茶庵」のミス。同 24頁上段「六月」は「六日」のミス。

季語やぶにらみ (三)

壬申の年(3)

踏み迷ふ歴史の迷路夜半の春

隆一

六一二年の壬申から六七二年の壬申までの六〇年間の後半は、律令国家成立に向けて着々とその地歩を固めていた時代がある。そ

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}

(随筆家)

の第一歩が六四五年に起きたクーデターで、蘇我大臣家の専横を憎んでいた豪族の不平等子が中大兄皇子を戴いて、蘇我入鹿誅殺に奔ったのである。その中には、蘇我氏の一族である蘇我倉山田石川麻呂や蘇我赤兄も含ま

れていた。

クーデターの引き金となったのは、六四三年、父蝦夷の命により、入鹿が山背大兄王を大和斑鳩寺（現法隆寺）に攻めて、自殺に追いやったことであつた。舒明・皇極と続いた皇位継承問題の余燼が、一五年間も燐り続いていたのである。禍根を断つには、山背を亡き者にするのが一番手っ取り早い方法で、「朝廷に対し謀反の兆あり」というのがその理由だったが、山背大兄王の預かり知らぬことであつた。

山背の死は豪族間に反蘇我の機運を高める効果はあつたが、クーデターに結びつくまでには至らなかつた。舒明天皇の第二皇子中大兄皇子も蘇我大臣家の覆滅を図っていたが機会に恵まれず、徒らに時は流れるばかりで

あつた。しかし、志を同じくする中臣鎌足を軍師に迎え、石川麻呂等を反蘇我陣営に引き込むことによつて、ようやく構想は固まり、後はきつかけを待つだけとなつた。

六四五年の夏、朝鮮からの使者を接見する日、中大兄が病に臥したため、急扨その役目は入鹿に廻つてきた。前夜密かに皇子の使者として石川麻呂が入鹿を訪ね、その旨を要請したのである。入鹿はかねてから皇子等の動向には注意を払っていたが、使者が同族の石川麻呂だったこともあって、つい気を許して引き受けてしまった。皇子に懇願されると悪い気はしなかつたし、代理が務まるのはこの俺しかないという自負もあつた。

翌朝、入鹿が衣冠を正して太極殿に入ると、案内役の石川麻呂に「お腰のものを」と体よ

く佩刀を取り上げられてしまったが、意にも介さなかった。「しばらくお待ちを」うやうやしく一札すると、石川麻呂はそそくさと接見の間を退出した。正面に一つ、ぽつんと玉座が置かれているだけの殺風景な部屋であった。玉座に近づくと、入鹿はその肘掛けに手を触れてニヤリと笑った。

〈早晩、俺はこの椅子に坐ることになる〉

その時であった。玉座の背後の幕を揆ね上げ数名の兵が現れ、物も言わずに手にした鉄槍を入鹿の身に突き刺した。兵の中には日頃入鹿の身辺敬後に当たっている者の顔もあった。

「なぜだ！　なぜ貴様が……」

一言呻くように言うと、入鹿は絶命した。

「天謀だ！　天謀であるぞ！」

と喚く石川麻呂の声も、もう入鹿の耳には届かなかった。あつけない最期であった。しかし、もっと哀れだったのは蝦夷であった。入鹿殺さるの報に、私兵を集めてクーデター派と一戦交えようとしたが、兵は逃散し、味方する豪族もなく、翌日、彼は邸に火を放って自ら火中に身を投じて果てた。一五〇年近くも権謀術数の限りを尽くして我が世の春を謳歌していた蘇我大臣家は、たった二日で滅んでしまったのである。

この政変によって皇極天皇は退位し、クーデターの立役者となった中大兄に即位を促したがが固辞したため、やむなく実弟の軽皇子に後事を託し、ここに第三六代孝徳天皇の誕生を見たが、同時にクーデター派は鎌足の献策に従って、中大兄の異母兄である古人大兄

の皇太子位を剝奪して中大兄を皇太子に立て、蘇我色を一掃することに成功した。そして、先進国唐に倣って「大化」という元号を定め、都を難波へ遷し、中央集権国家としての形態を整えるために、翌年には早くも、私有地・私有民を禁止して豪族を締めつけ、国・郡・里制による地方行政権の朝廷集中、また調査によるより詳細な戸籍の作成や班田収授法（満六歳以上の男子に二段、女子にはその三分の二、奴婢にはそれぞれ三分の一を基準とする口分田を授けて終身利益を許す。そして、死ねばその耕田は国家に帰属することとし、出来高の約二パーセントを徴収する。なお、公平を期するために、耕田は六年ごとに割換えを行う）の実施、調・庸など税制の統一の四綱目から成る改新の詔を公布してい

る。難波に遷都したのは外交政策に基づくものと思われるが、事実数次の遣唐使船も、百済救援に向かう遠征軍の船団も、この難波津から発進している。この都は六五〇年頃には捨てられ、朝廷は飛鳥へ戻ることになるが、防衛上の見地からか、新政権に対する豪族たちの不穏な動きを察知してとられた措置であつたかは定かでないが、出来上がったばかりの都を捨てなければならなかつたのだから、余程切齒詰まつた事情があつたに違いない。捨てられたのは都だけでなく、六五四年、孝徳天皇は失意のうちにこの地で歿した。もはや新政権は統率者としての天皇を必要とせず、単なる象徴としての天皇しか認めていなかった節がある。というのは、孝徳天皇の歿後も中大兄は即位せず、一度退位した母皇極

を再び即位させて第三七代斉明天皇とし、母天皇が朝鮮遠征の途次筑紫朝倉宮で病歿（六六一年）した後も称制政治を敷き、第三八代天智天皇の位に就いたのは、更に七年後の六六八年のことであった。大化の改新後常に天皇の陰にあつて政治の実権を握っている様は、蘇我大臣家のひそみに倣つた観がないでもないが、革新政治を行うには、これ以外に方法がなかったのかもしれない。七年間も天皇不在で、称制という変則的な政治を行わざるを得なかつた背景には、新制によつて、かつて所有していた権利を朝廷に召上げられた豪族たちの不満が高じて、いつどの地から反乱が起きてもおかしくない状態に置かれていたからである。中大兄にとつては、正に外優外患交々至るといった毎日であつたことは

否めない。

政治の上で大海人皇子の名がクローズアップされるのはこの時期で、筑紫にとどまつて防衛軍の指揮を執つていた大海人が飛鳥へ呼び戻されて、すぐさま新政の行き過ぎを是正する形の、豪族の主権者たちに私兵を持つことを許し、これまで一九階だつた冠位を二六に増やして、下級貴族や氏族たちの官人登用を容易にする施策を、大海人皇子の名で宣布して以来のことである。勿論、これは大海人個人の考えではなく、中大兄や側近の鎌足等と合意の上で布告であつたが、再び自分の一存で徴用・徴税の可能な私民を持つ権利を回復した豪族たちの目には、大海人皇子は輝く朝廷の星と映つたに違いない。

大海人は舒明天皇の第三皇子であるが、生

年が分からないので、実兄の中大兄とどのぐらい年が離れていたのか見当のつけようがない。大化の改新の時、中大兄は一九歳であったが、大海人がこの企てに参画していないところを見ると一〇歳ぐらい違うようにも思えるし、後にそれぞれの娘を贈り合つて、それぞれの妃としているところから察すると、それほど年の差はなかったようにも思えるのである。

大化の改新以後の政治には幾つかの矛盾があるが、その一つが三度にわたる遷都である。税制を改めて増収を図り、それを膨脹する軍備に当てていた時、飛鳥から難波へ、難波から再び飛鳥へ、更に飛鳥から近江へと、憑かれたように金のかかる遷都を繰り返しているのである。また、この新政の推進者たち

は、かつて蘇我大臣家が為したごとく、邪魔者は「謀反」という罪にかけて、次々に抹殺している。主だったところでは古人大兄皇子、クーデターの功労者の一人蘇我倉山田石川麻呂、孝德天皇の第一皇子有馬皇子等が、その犠牲者である。大海人皇子が軍事面を掌握して中大兄の称制政治をささえてきたことに疑いはないが、これらの事件にどのぐらい深く関わっていたかは明らかにされていない。恐らく殆どタッチしていないのではないだろうか。中大兄が即位した時、誰もが大海人が皇太子になる、つまり皇位継承者の地位に就くものと思っていたが、それをしなかった。ただ鎌足から朝臣の総意という形で就任の打診があつたが、

「みんながそう思っているのなら、それでい

いではないか。俺はそんな七面倒臭い身分は性に合わないが……」

と笑つて受けなかつた。肩書などには頓着しないおおらかな性格であつたし、天皇から一言もその要請はなかつた。庶子ではあるが天皇には大友皇子という立派な後継ぎがいた。母が卑しい身分の出であつたため、とかく世間から軽く見られがちなのを一番不憫に思っていたのは天皇で、称制時代から常々側近に、

「俺にもしものことがあれば大友を頼む」

ともらしていたので、大海人の口から皇太子の地位を要求することはできなかったし、する意思もなかつた。鎌足に打診された時も、「俺の役目は天皇を補佐して民心を安んずることだ。そのためには、天皇にかかる火の粉は

俺が代わつて被らねばならぬ。物心ついた時から俺はそう心掛けてきた。ただあの時だけは俺の意志ではなく貴公の献策に従つたが」と、大海人の名で新法是正の布告を出して、豪族の反乱を未熟に防いだ時のことを持ち出して言った。

「しかし、あれで一番得をしたのは、この俺だったかもしれんな」

「ああ、皇子は真の仁者でいらつしやる」

鎌足は、天皇とは全く性格の違うこの皇子が好きだった。

「ま、それはともかくとして、俺の役目は補佐役に徹することだ。だから天皇の意に添わぬ奴は俺が斬る！」

「さあ、皇子にそれがお出来になれますかな。多分お出来にはなれますまいよ」
(続く)

◎ 読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努めています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ風におまとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六～十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十八巻 五月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成四年四月二十五日 印刷

平成四年五月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 南小暮製本印刷

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三（三三六）五九四四

〒一〇三（振替）東京八一八二一八七

◆◆◆好評の新刊◆◆◆

教訓仏教語辞典

栗田順一編 価格一六〇〇円

○仏の教えはいつも新しい！

日常用語として使っている仏教語も、その意味をよく理解してみると、私たちの暮らしに密着した教えが多い。本書はなじみ深い仏教語の意味を生活に密着したかたちでわかりやすく説いている。

〈出版・発行〉

東京堂出版 東京都千代田区神田錦町三―七 電話（〇三）三三三三―三七四一

*浄土宗出版室において特価で販売しています。

お申し込みは浄土宗出版室 電話（〇三）三四三六―三三五一まで。

第五十八卷

三月号

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
平成四年四月二十五日印刷 平成四年五月一日発行